2024年6月

民際協力ニュース

パルシック ニュース VOL.44

パルシック PARC Inter-peoples' Cooperation

「戦争の日常が普通になってはいけない」ガザからの声

2023年10月7日のハマスら抵抗組織によるガザ地区からの越境攻撃を皮切りに、イスラエルによるガザへの無差別な大規模攻撃が始まって半年以上が経ち、状況は悪化の一途を辿っています。ガザでの死者数は少なくとも3万4735人に達し（2024年5月6日時点）、人口の75％以上となる170万人が国内避難民となり、飢餓や感染症の蔓延も深刻化しています。

パルシックは2023年11月から緊急支援を開始し、ガザ事務所の職員たちは、自らも耐え難い状況にありながらも、猛烈な勢いで支援に奔走しています。永遠に感じられる時間をなんとかやり過ごそうと、仕事に打ち込んでいるのです。

長期にわたる激しい攻撃と封鎖で、人が生き延びることさえ難しいガザでは、家畜として飼育されていた動物も全滅の危機に瀕しています。家畜に与える飼料や水の確保が難しいうえ、時には農家は自分たちの食料として食べたり、食用肉として売ったりせざるを得ない状況です。パルシックが戦争前から支援する羊農家を、戦争中も訪問して支援を続けているガザ事務所の職員で畜産専門家のマフムードは「私たちが生きている間に自分の目でこれほど悲惨な状況を体験するとは思ってもいませんでした。人びとも羊も生きるのに必死です。農家はガザの動物が全滅しないように今も必死に羊を育てています。私も羊用の薬やビタミン剤を配付するなど、できる限りのことをして羊を守り抜きたいです」と熱い想いを伝えてくれました。

上：羊農家を訪問し、羊の状態を確認するマフムード。羊たちは栄養失調で痩せ、毛並みも黒くなっている　下：国内避難民を対象とした食料バスケットの配付の様子。衛生用品や衣料品、仮設テント用シートも配付した

ガザ事務所のシャディは次のように訴えます。「私たちは本当に疲れています。戦争があり、死と隣り合わせであることが日常となっていますが、この戦争が一生続くわけではない、いつか終わると信じています」。このガザの人びとが直面している「日常」を終わらせるために、日本の私たちにも行動が求められています。パルシックは緊急支援とともに、パレスチナを知り、向き合うための連続講座の開催や、パレスチナで活動している他団体とともにアドボカシーを続け、即時停戦とその先の解決へ向けて、引き続き取り組みます。

2歳以下の赤ちゃんがいる世帯におむつを配付

パレスチナ・ガザ緊急支援へのご寄付

■**クレジットカード**（webサイト）
https://www.parcic.org/news/23297/

■**銀行振り込み**（ゆうちょ銀行から）
記号：10180
番号：77335011
名義：特定非営利活動法人パルシック

■**銀行振り込み**（ゆうちょ銀行以外から）
店名：〇一八
店番：018（普通）7733501
名義：特定非営利活動法人パルシック

＊お振込みの際は、お名前・ご住所・寄付先「ガザ支援」をフォームよりご連絡ください。

寄付ページ QRコード

（この事業は、日本NGO連携無償資金協力、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

目次

パレスチナ　「戦争の日常が普通になってはいけない」ガザからの声…… 1
東ティモール　地域の人びととの道づくり／**ミャンマー**　避難民の増加と緊急の食糧配付…… 2
レバノン　新たな試み、アッカール県での野菜づくり／**シリア**　村の小さな店が灯す復興への希望…… 3
トルコ　震災からこれまで／**シリア**　厳しい状況はつづく、シリアの被災地…… 4
能登半島地震　ホッとできる時間・人との繋がり／**みんかふぇ**　口コミで広がる居場所の輪…… 5
フェアトレード　東ティモール　5か年のコーヒー畑改善事業の終了、コカマウの自立的な活動へつなぐ／スリランカ　デニヤヤの地域で有機農業が広がることを目指して…… 6／フェアトレード 日々のこと／開催報告 コーヒーの未来～東ティモールのコーヒー生産者と考える～／開催報告 スリランカ ルフナ紅茶の産地を訪ねる旅／ちょっと寄り道♪フェアトレードな人びと…… 7
パルシックからのお知らせ　企業との協働レポート／サポーター／寄付・会員募集…… 8

東ティモール　地域の人びととの道づくり

2023年から開始した「女性の生計向上を通じた子どもの栄養改善事業」は、この3月に2年目を迎えました。この事業では、女性たちが栄養に関する知識を学び、花卉栽培からの収入を家庭での栄養改善に結びつけることを目指しています。

1年目に参加した4つのグループ、25世帯の女性たちは、試行錯誤をしながら花の栽培を続け、良質な花を首都ディリの生花店に定期的に納品し、収入を得ることができるようになってきました。2年目にはさらに8つのグループ、45世帯が参加します。これら参加女性グループの中でも特に道路状況の悪い2つのグループへのアクセスを改善するために、4月からNPO法人道普請人と連携して、橋や水路の補修を開始しています。偶然にも道普請人のはじまりは、ケニアの花卉栽培農家を市場へつなげるための道づくりだったそうです。

完成間近の橋

今回補修する道は3村12集落が町に出るために利用しており、花卉栽培に参加する女性グループだけではなく、およそ750世帯の利便性が向上することになります。特に高い技術を必要とする橋の建設には日本から招へいした専門家が立ち会い、各集落から交代で20人ずつが参加し、パルシックの技術スタッフも一丸となって、恒久的に使える橋を架けようと日々作業をおこなっています。（林知美）

（この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

ルシアナさん
（アイナロ県マウベシ郡の女性グループ）

雨季になるとバイクも車も通ることができなくなるこの道の改善は、私たちの花の出荷がしやすくなるだけでなく、私たちの生活を大きく変えてくれると思います。毎日作業に来てくれる各集落の男性たちへの食事の準備は骨が折れますが、苦ではありません。自分たちの力で橋や水路を補修してアクセスを改善できることは、子どもたちにも誇ることができます。

苗づくりをするルシアナさん（真ん中）

ミャンマー　避難民の増加と緊急の食糧配付

2021年2月に国軍はクーデターを起こし、抵抗する市民を容赦なく殺害するようになりました。学校や病院は空爆の標的となりました。ミャンマーは今、複数の武装勢力が市民を巻き込んで争う戦地となっています。クーデターから3年以上が経過し、人道状況は悪化し続けています。この1年間で122万人が新たに国内避難民となり、国民の20人に1人が住む家を追われています。2024年からは徴兵制が導入され、人びとは窮地に立たされています。

パルシックは、新たに国内避難民となった人びとに、緊急で米を配付しています。戦時下での米の調達と輸送は簡単ではありませんが、地域の人たちの助けを得て、これまで2000世帯以上に複数回、米を配付してきました。

国軍により燃やされた家

また、クーデターにより公立学校が休校になってしまった地域では、代わりとなるコミュニティスクールに教科書や文具を配付し、教師への教員研修を実施したり、地域医療が崩壊した農村地域では医薬品を配付し、医療従事者へ手当を支給したりするなど、クーデターにより職を失い無償で働いている教師や医療従事者を支援しています。さらに、女性が自力で生計を立てられるようにするための縫製研修も今春から始めました。

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

Zさん（27歳、5人きょうだいの4番目）

クーデターが起きて治安が悪化し、勤務先が営業停止となったため、私は職を失いました。そもそも雇用の機会が少ない地域でしたが、今は仕事を見つけるのは非常に困難です。戦闘はいつどこで起きるか分かりませんし、村の周りには地雷もあるため、遠くまで出歩いて仕事を探すことができません。あらゆるものが値上がりし、お米を買えないこともしばしばあります。パルシックからお米をもらい、食料の心配をしなくて済むようになりました。収入が得られたときには、教育や医療などに充てることができます。

米配付の様子

レバノン　新たな試み、アッカール県での野菜づくり

マルハバ（こんにちは）！レバノンの最北部、シリアと国境を接するアッカール県で2024年4月から農業を通した食料支援を開始しました。同県はレバノンの中でも最も貧しい地域で、シリア難民キャンプが点在しています。農業が盛んなアッカール県ですが、未曽有の経済危機の中にあるレバノンでは種や肥料などの農業資材の価格が高騰し、多くの農家では生産量が低迷し、生活苦に陥っています。

この事業では、提携団体が所有する農地を1000平方メートルずつ、農地を持たないレバノン人とシリア難民、合計16世帯に貸与します。余った土地にはビニールハウスを設置して野菜を栽培します。この両方の農地で、仕事がなく困窮している世帯が働いて現金収入が得られるよう、農作業の日雇い労働の機会も提供します。貸与した土地の収穫物の一部は借地料の代わりとして提携団体に納められますが、提携団体は受け取った野菜を、ビニールハウスの収穫と合わせて、困窮するシリア難民、レバノン人の800世帯に食料支援として配付する予定です。また近隣のレバノン人農家86世帯には種や肥料などを配付するとともに、技術研修を実施します。この事業を通して地域の農業生産を後押しし、食料危機の緩和を目指します。

（中島雅樹）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

提携団体URDAが所有している農地。1,000平方メートルずつ貸与して野菜を栽培

人びとの声

事業をともに実施する現地提携団体URDAの担当スタッフ、ザフさん

レバノンでは2019年から終わりの見えない経済危機が続いています。経済危機で物価が高騰して食費が家計を圧迫するため、人びとは食事の量や回数を減らしたり、安価な食品に頼ったりして、レバノンで最も貧困率の高いアッカール県では深刻な栄養不足が懸念されています。シリア難民だけではなく、レバノン人の暮らしも逼迫しています。農業支援を通じて食料生産と食料配付を行うこの事業は、非常に意義があると感じています。

中央野菜市場に同行するザフさん（写真左）

シリア　村の小さな店が灯す復興への希望

2023年10月からシリア中部のハマ県にある農村地帯で小規模ビジネスの起業支援を行っています。2011年から紛争が続いているシリアでは多くの建物やインフラが被害を受け、人びとの生活が破壊されました。かつては村の中で手に入った、日常生活に必要なちょっとした物やサービスも、今では交通費をかけて近隣の大きな町まで行かなければ手に入らなくなっています。

この事業では希望する村人にビジネス研修の機会を提供し、受講者が作成したビジネスプランの中から村の人びとにとっても有益だと思われるものを選んで支援することにしました。選ばれたプランの大半は小規模なお店を始めるというものですが、他のプランや既存のお店と競合しないよう、立地や商品の構成を考慮しました。支援を受けて実際にオープンしたお店では順調に売り上げを上げています。近所の住民からは町まで行かずに必要なものが手に入ると喜ばれています。支援を受けたのは女性が多く、女性が開いたお店は特に女性客から「安心して店に入り落ち着いて商品を見ることができるし、女性目線でニーズに合ったものが手に入ってうれしい」という声が多く寄せられています。

（アンソニー／岡崎文香）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

いくつかの小さな店が村でオープン。町に行かなくても生活必需品が買えるようになった

人びとの声

夫を亡くし、6歳と4歳の二人の息子を育てるシングルマザーのアイシャさん

故郷の町で戦闘が激しくなったので、ここへ避難して住むようになりました。農作業の日雇い労働をして何とか暮らしていました。商売の知識も経験もありませんでしたが、ビジネス研修を受けてアイディアが浮かび、支援を受けて、日用品を売る小さな雑貨屋を始めました。商売は想像以上に順調です。以前は孤独でしたが、店を始めて村の人たちと仲良くなりました。今年はようやく息子を学校に行かせられそうです。

アイシャさん（右）と経営する小さな雑貨店

トルコ　震災からこれまで

トルコ・シリア地震の発災直後から、パルシックは政府などの支援から取り残されていた世帯を対象に、緊急支援活動を行なってきました。2023年8月から、被災県の1つであるカハラマンマラシュ県の、とりわけ支援活動の希薄さが指摘されていた北部ギョクスン郡農村部にて、3か月間にわたる食料・衛生用品の配付を実施しました。11月からは、冬の厳しさで知られる同地の越冬支援として、コンテナの仮設住宅等に居住する被災世帯への暖房器具と冬服購入用のバウチャーの配付を行いました。また、この地域は畜産業が盛んで、震災により畜舎や家畜を失った多くの農家に対し、耐寒耐候性のある家畜用シェルターの設置を行いました。

発災から1年半、季節も廻り被災地では再び夏の香りがし始めています。人びとの生活は落ち着きを取り戻しつつあるとはいえ、今なお多くの世帯がコンテナの仮設住宅等での避難生活を送っており、住宅・インフラ整備など、復興再建へ向けての取り組みも地域によって大きく異なります。復興への道のりはまだまだ長いですが、パルシックのトルコでの地震被災者支援はこの事業で終了することとしました。これまでたくさんのご寄付やご支援をお寄せいただき、本当にありがとうございました。

（土橋弘）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しました。）

越冬支援で設置した家畜用シェルターテント

人びとの声

チャルダック村のジョシュクン村長

支援物資の配付時、住民確認を行う村長

ジョシュクン村長は、エネルギッシュでありながら公平で律儀な人となりから住民の方から信頼されており、活動を通してその人望とリーダーシップを大いに発揮してくれました。今回の緊急支援に対しても「震災後の住民の生活改善のための大きな助けになった」という言葉をいただきました。同時に、この活動が村長をはじめ多くの人の協力のもとで実施できたものであることを改めて実感しました。

（土橋）

シリア　厳しい状況は続く、シリアの被災地

12年以上続く内戦でシリア国民の7割以上が人道支援を必要としていた最中、去年2月の大地震が発生しました。震災から1年以上が経ちましたが、経済悪化、通貨価値の下落、物価の上昇、気候変動の影響、内戦の激化などにより、シリア国内の状況はさらに悪化しています。

パルシックは、地震で破損した家屋や、公共インフラ（給水設備、下水管、学校）の修繕を行い、被災した人びとの生活環境の改善に取り組みました。被災地はオリーブ栽培が有名な土地で、震災前は地域の女性が中心となり、季節労働者と共にオリーブの実の収穫を担ってきました。しかし、今年の収穫の時期は、より高い収入の望める震災復興の建設業の働き口が多くあり、オリーブの収獲に十分な人手を確保できない状況でした。そこで、建設業の日雇いと同じ賃金を支払うことで収獲に必要な日雇い労働者を確保し、例年のような収獲を実現しました。オリーブはシリア国内のみならず海外にも輸出されている主要農作物のため、オリーブ農家の活動継続はシリア経済にとっても重要です。同時にオリーブの収穫には多くの女性が昔からかかわり、女性が収入を得られる数少ない機会でもあります。

今後は、今年9月まで毎月1回、被災した女性世帯29世帯に対して食料配付を行い、パルシックの被災地支援活動は終了します。

（飯村文）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しました。）

オリーブの実の収穫の様子

人びとの声

修繕した学校の生徒・教師の声

子どもたちにとって、人生で初めて体験した地震が昨年2月の大地震でした。地震により破損した校舎で不安を抱えながら生徒は授業を受けており、教師も生徒の集中力が欠けていることを懸念していました。しかし校舎の修繕後、生徒からは「学校が安全に感じられるようになり、授業に集中できるようになった」という声、教師からは「教室が直って、生徒たちは落ち着いたように感じる。学校環境の改善がよりよい学びの場になっていると思う」という声をいただきました。

修繕後の校舎で授業を受ける生徒たち

能登半島地震　ホッとできる時間・人との繋がり

2024年1月1日、能登半島で震度7の地震が発生しました。パルシックは1月6日に職員を被災地に派遣し被災状況の調査と物資配付を開始し、現在は能登町を拠点に活動を続けています。発災から2週間ほどが経過し、ある程度の物資が届いている避難所では、少しでもホッとする時間を提供したいと思い、『ちょっこりカフェ』という名前で、コーヒーと茶菓子を提供し始めました。中には、コーヒーを飲んで「こういう当たり前の日常って大事だよね……」と涙を流す方もおり、長引く避難生活の中で張り詰めた気持ちを抱えていたことが伝わってきました。2月後半からは、地元の方と連携しながらアロマ作りやハンドマッサージのイベントを開催したり、地震後に会う機会が減ってしまった地域の人が集まる場づくりを行ったりしました。参加された方から「久しぶりにたくさん話せて楽しかった」という声を聞き、私たちもうれしくなりました。

三波公民館での「ちょっこりカフェ」の様子

発災から4か月が経過し、仮設住宅に移る方、避難所で避難生活を続ける方、在宅被災者の方、一人ひとりの抱える課題は異なります。これまでの活動の中で出来た繋がりを活かして、被災された方が必要としていることを理解し、復興に向けてできる支援を続けていきたいと思います。

（鈴木桃子）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

人びとの声

子どもたちのためにピザ作り体験を

能登町にある5つの小学校は全てが避難所となり、地震と津波で家屋の倒壊被害の多かった鵜川地区にある鵜川小学校も3月まで体育館や運動場が利用できませんでした。そんな中、農家民宿とピザハウスを営む山﨑さんは「被災した子どもたちに、少しでも楽しんでもらいたい」とピザ作りイベントを企画。パルシックも学生ボランティアの方と一緒に運営をお手伝いしました。震災の影響で活動できていなかったと子ども会からの参加もあり、ピザを囲んで保護者同士が久々に会う場にもなりました。

ピザが焼きあがるのを待つ山﨑さんと子ども

口コミで広がる居場所の輪

東京都葛飾区白鳥地区にコミュニティカフェ「みんかふぇ」を開設して7年目となりました。ボランティアに支えてもらいながら、カフェ、みんかふぇ子ども食堂、フードパントリー（食材配付）、イベントなどの活動を通した居場所づくりに取り組んでいます。

カフェでは昨年から、ランチやスイーツを提供しています。味も好評で、段々とお食事のお客さんが増えてきました。お客さんからの「軽食としてサンドウィッチがあると嬉しい」との声に、新しいメニューのアイデアを出し合うことも。在庫を確認し、調理を担うボランティア同士で、いつ誰が作るか相談しながら進めています。

みんかふぇ子ども食堂は、4月から予約をしていなくても食事ができるようにしました。これまで通り、予約をして来る方もいます。最近は、予約をした家族が友だちを連れて来ることが多く、15席ほどしかない店内はすぐ満席になります。食事が終わった後、子どもたちはカードゲームで遊び、お母さんたちはホッと一息ついたりお喋りしたり。「私は○年生！　あなたは？」と初めて話す子ども同士が友だちになる場面もありました。

この空間を共有したいという想いで徐々に広がる利用者やボランティアの繋がりに、頼もしさや有難さを感じながら、できることから着実に取り組んでいきます。

（吉浦諒子）

（この事業は、ニッセイ財団、赤い羽根共同募金、こどもの未来応援基金と皆さまからのご寄付で実施しています。）

食堂では、利用者とボランティアが一緒に食事をすることもあります

人びとの声

みんかふぇボランティア 倉澤さん

倉澤さん

居場所作りのお手伝いができればとの思いで、「みんかふぇ」でボランティアをするようになり、はや1年半が過ぎました。カフェや食材配付などいろいろな活動に参加する中で、多くの方々と知り合いになり、みんかふぇがいつの間にか私自身の退職後の生活に欠かせない「居場所」になっていることを実感しています。世代や文化の違いを超えて、地域の人びとが気軽に集える場所として、今後さらに活動の輪が広がってゆければと思っています。

from Timor Leste

5か年のコーヒー畑改善事業の終了、コカマウの自立的な活動へつなぐ

2019年11月からコカマウと共に取り組んできたコーヒー畑改善事業は、いよいよこの8月に終わりを迎えます。事業では、古くなったコーヒー畑を改善して生産性をあげること、その過程で得た技術を普及させていく若い人材の育成を目的としています。畑の改善を始めると一時的にコーヒーの収穫量が減少するので、参加に消極的な世帯も多かったですが、初年度には18集落31世帯のモデル農家が専門家の指導のもと、老朽化したコーヒーの木の台切りや植え替え、土壌改良、等高線栽培などの新しい技術の導入に挑戦しました。

2年目以降は、モデル農家が改善した畑の様子を示しながら研修を実施。集落ごとに作業代表者を決めてもらい自立的な活動を促進することで、この取り組みが地域内で広がりはじめました。

モデル農家の畑

5年目にあたる今年までに、28集落305世帯がコーヒー畑の改善に取り組むまでに拡大しました。事業の早い段階から精力的に活動に取り組んでいる農家の畑では着実に成果が現れはじめ、収穫期に以前よりも多くのコーヒーの実をつけています。

私が事業担当として赴任し、初めてレボテロ集落を訪れた際にコーヒーの木が林のように生い茂っていたのに衝撃を受けましたが、この5年で畑らしい様子になり満開のコーヒーの花が咲いたのを見たときはとても感慨深かったです。

事業が終了した後も、コカマウ組合は自立的に畑の改善を続け、事業スタッフは5年間で培った経験を活かして、組合の事務局として地域全体のコーヒー畑の改善技術を普及させていきます。地元の若者たちが自らの土地で誇りを持って働ける環境を整えられるよう願っています。

（東ティモール事務所
コーヒー事業担当　工藤竜彦）

二世代での作業

農家でのモニタリングの様子

from Sri Lanka

デニヤヤの地域で有機農業が広がることを目指して

2011年度からスリランカ南部デニヤヤでの紅茶の有機転換事業を開始して、13年の年月が経とうとしています。この間に、小規模有機紅茶生産者グループ「エクサ」を結成し、有機認証を取得し、エクサへの参加農家を増やし、有機紅茶として日本への輸出を続けてきました。しかし、有機紅茶の生産性がいまだ低いことがエクサのメンバーが有機の圃場を十分に広げられない、また地域の新規農家が有機転換に踏み切れない要因となっています。2024年6月からの5年間、JICA草の根技術協力事業で、日本の堆肥作りの専門家とスリランカの紅茶栽培の専門家の協力を得て、有機紅茶の生産性の向上に取り組みます。皆さんに末永く、安心してオーガニックの美味しいデニヤヤの紅茶を飲んでいただけるよう、エクサ参加農家の収入向上と有機圃場の拡大を目指します。

デニヤヤのコンポストセンター（エクサの共同堆肥舎）で今年生まれた牛の赤ちゃん

パルシックの フェアトレード商品

対等な交易を通じて、人と人のつながりと信頼を広げていくことこそが紛争の抑制、平和の形成に寄与すると考え、「商品の生産、流通、消費などが、市場の価格だけに依存するのではなく、人間的な交流と信用に基づく」という取引のかたちを目指して、直接的な交流、交易を重視しています。

＊

ParMarcheのコラム
「日々のこと」も発信中です。
ぜひご覧ください。

フェアトレード　日々のこと

カフェ・ティモール（粉／豆）の新パッケージ

パルシックの商品の中で最もロングセラーで、発売以来多くの方にご愛飲いただいている「カフェ・ティモール（粉／豆）」ですが、この度、発売以来初となる本格的なパッケージのリニューアルを行いました。私たちの長年の希望であった、できる限りプラスチックを減らした素材を探しに探し、やっとたどり着いたと言っても過言ではありません。

コーヒーは一般的に、焙煎後に油分を含んだり、ガスを発生させたりするため、どうしてもフィルムやバルブにプラスチック素材の使用は欠かせないのですが、品質保持をしつつ、外側は紙の比率を高めた「シールドプラス®」という新素材を使っています。実は、コーヒー業界では初めての採用です。袋に印刷されているリサイクル表示は「紙」ですので、ご使用後は燃えるゴミとして扱っていただけます。

また、デザインには東ティモールの伝統的な織物であるタイスの柄をあしらえ、手にとっていただいた時に東ティモールを連想できるような、そして何となくほっこりするような感覚をお届けしたいという思いを込めました。

東ティモールでコーヒーを作り続けていく生産者とともに、これからもよりおいしいコーヒーをお届けできるよう、商品づくりに励んでいきます。

開催報告　コーヒーの未来 ～東ティモールのコーヒー生産者と考える～

開催：2024年2月25日

右から登壇者のネルソン、ジュリオさんと通訳を担当した東ティモール事務所代表の伊藤淳子

2024年2月、京都にある西本願寺にて久しぶりに関西でイベントを開催しました。初来日の東ティモール事務所のコーヒー事業責任者のネルソン、コーヒー生産者協同組合コカマウの組合長のジュリオさんを迎え、気候変動がもたらす影響を生産者、消費者のそれぞれの視点から考える場を持ちました。

会場では地元のサーカスコーヒーさんが焙煎したアラビカ種とロブスタ種のコーヒーをお配りしました。参加者同士の交流の様子も目にして、みなさんが東ティモールコーヒーを通じて楽しい時間をもっていただけたことが、企画した側としては何よりの喜びでした。

開催報告　スリランカ　ルフナ紅茶の産地を訪ねる旅

期間：2024年2月18日（日）～24日（土）7日間

下：ツアー参加者のみなさん　左：ご自宅の庭になったココナッツを参加者に振舞ってくれた紅茶農家のアーリヤラトネさん

4年ぶりに開催されたスリランカ紅茶ツアーには、8名の方にご参加いただきました。今回の旅では、コロナ禍、2022年春以降の経済危機、そして気候変動などの困難な状況の中で、有機紅茶作りを地道に続ける農家の方々、農村で暮らす人びと、そして加工場や輸出会社で働く方々との出会いを通じて、日本に届く1杯の紅茶の背景を深く知ることができました。

「産地でのドライブは、美しい自然と一体となり、風を肌で感じることができました。あの開放感は、言葉では表現しきれません。そして、道行く人びとが笑顔で手を振ってくれるのです。デニヤヤの農家訪問やエステート見学も非常に興味深く、まるで新しい世界が次々と広がるような発見の連続でした」。（五十嵐敦子さん）

ちょっと寄り道♪ フェアトレードな人びと

「コーヒーノキ」店頭に並ぶホームメイドのお菓子

福島県福島市にある「自家焙煎コーヒーノキ」。2023年10月にオープンしたこの店を営むのは、小林みゆき・史依さん親子です。東ティモール・スリランカツアー両方に参加されたお二人は「伝えられる」商品として、パルシックのコーヒーと紅茶を提供しています。

もともと「カフェ・ティモール」をよく飲んでいたというみゆきさん。高校教師だった7年前に焙煎を始めると、コカマウはどんな焙煎度でも美味しいことに気が付きました。友人たちからも「美味しい」と言われ、カフェ開店を決意し、美大卒で料理好きな史依さんとコーヒー・紅茶に合うパンやスイーツを考案するなど、開店準備を進めてきました。

お店の人気商品は、コカマウの深煎りコーヒーとアールグレイ紅茶を使ったアールグレイシフォンケーキ。誰でも、もう一度来たいと思えるカフェを目指し、素材にこだわったパンやスイーツの新メニュー考案や、親子で利用できる居心地良い空間づくりに力を入れています。

店名である「コーヒーノキ」は、コーヒーチェリーがなる植物の正式名称。「自分が生産地に行って感じたことは自分にしか伝えられない情報。私たちがコーヒーや紅茶を飲むほどに、生産者の生活も豊かになる店を目指します」。

自家焙煎 コーヒーノキ

営業日　金・土・日・月曜日　11:00-18:00
住　所　福島県福島市霞町8-21
https://coffeenoki-fukushima.com

企業との協働レポート

新丸の内ビルディングでフェアトレードの販売会を行いました

毎年5月はフェアトレード月間です。5月22日、SMBC日興証券さんの企画で、新丸の内ビルディングにて、フェアトレードの販売会を開催しました。

2023年より、SMBC日興証券さんの会議室を会場とした社内販売会を何度か開催してきました。商品を通じてフェアトレードの取り組みや考えを普及することで、SMBCグループが掲げる重点課題の一つ「貧困・格差」の課題解決につなげることを目的とされて、パルシックとの協働の機会をいただいています。

今回の会場となったのは、新丸の内ビルディング内にある共同飲食スペースです。このスペースは新丸の内ビルディングにお勤めの他の企業の方も利用される場所のため、これまでの販売会から来場者層がぐっと広がりました。

会場ではフェアトレード商品の販売ブースのほか、すぐ横のスペースをお借りして活動のポスターや写真パネルを掲示し、パルシックの活動をフェアトレードだけでなく、民際協力活動の面からも伝えることができました。特に、ガザ緊急支援の掲示物に足を止め、食入るように見てくださっている方もおられ、その様子がとても印象的でした。

景色の良い会場の一角でフェアトレード商品を販売

ポスター、写真で活動の様子を伝える

また、カフェ・ティモールが環境負荷を抑えた新包材（*P7フェアトレードページ参照）にリニューアルしてから初めての販売機会となりました。フェアトレードの取り組みの一つ「環境に配慮する」という点もお話をしながら販売し、“フェアトレード”を一歩踏み込んで考えていただく機会にもなりました。

「フェアトレードを広めるためには、ただ知ってもらうだけでなくて、実際に購入してアクションにつなげていくことが、広げるために大事なことだと考えています」とSMBC日興証券の担当者さん。企業との取り組みは、パルシック単体の活動ではリーチできない新たな層を巻き込み、大きなインパクトにつながります。

今後も企業との連携を進めて、活動の広がりに取り組んでいきます。

皆さまのご支援によって支えられています

パルシックサポーターになって民際協力活動に参加しませんか？

毎月500円～継続してご寄付をいただく「パルシックサポーター」は、特に応援したい活動地を指定してサポーターになることもできます。クレジットカードでの毎月の自動決済なので、面倒なお手続きがなく、継続して活動を支えていただけます。

▶サポーターコース（クレジットカード自動更新）

毎月500円／1,000円／3,000円／5,000円コース

活動地指定　パレスチナ／みんかふぇ（葛飾区での居場所づくり）／ミャンマー／シリア・レバノン（シリア難民）／東ティモール／スリランカ／マレーシア

パルシックサポーター（継続寄付）、単発寄付のお手続き方法

Webサイト
https://parcic.org
にアクセス
⇒ 寄付で応援する から

寄付ページ
QRコード

パルシック会員募集

パルシックの趣旨に賛同し、総会等を通じてパルシックの活動に参加していただける会員、賛助会員を募集しています。

▶年会費

会　　員：10,000円
賛助会員：20,000円

※入会ご希望の方は、Webサイトよりご連絡ください。

あなたの寄付でパルシックの活動を支えてください。

みなさまの温かいご寄付をお待ちしています。パレスチナ ガザ地区への支援を特に募集しています。詳細は、民際協力ニュースに同封のチラシや Webサイトをご覧ください。

※パルシックは認定NPO法人です。パルシックへのご寄付・サポーター費は、確定申告によって所得税、法人税、相続税などの寄付金控除を受けることができます。

●クレジットカードでの寄付　Webサイトよりお手続きいただけます。
●郵便局からの寄付　郵便振替口座：00140-8-536957　口座名義：パルシック
●銀行からの寄付　三井住友銀行　神田支店（普）2384136　口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、ご住所とお名前をご一報ください。

民際協力ニュースは年に２回（6月・11月）にパルシックが発行するニュースレターです。送付の希望、送付先の変更、送付の停止については、office@parcic.org までご連絡ください。

民際協力ニュース　VOL.44　2024年6月

PARCiC
特定非営利活動法人 パルシック（認定NPO法人）
〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-7-11 東洋ビル1F
電話：03-3253-8990　Fax：03-6206-8906
メール：office@parcic.org　Web：https://www.parcic.org

オンラインショップ ParMarche（パルマルシェ）
https://parmarche.com
X　@parcic_office　@parcic_ft
facebook　@parcic
Instagram　@parcic_tokyo
YouTube　@ParcicChannel